

氏 名（本籍）	崔 文竹（ 中国 ）			
学 位 の 種 類	博 士（ 社会工学 ）			
学 位 記 番 号	博 甲 第 9686 号			
学 位 授 与 年 月 日	令和 2 年 9 月 25 日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審 査 研 究 科	システム情報工学研究科			
学位論文題目	健康な生活習慣を促進する都市・社会環境の構築 ー「健康決定因子モデル」に基づいたアプローチー			
主 査	筑波大学 教授	工学博士	谷口 守	
副 査	筑波大学 教授	博士（工学）	谷口 綾子	
副 査	筑波大学 准教授	博士（工学）	藤井 さやか	
副 査	筑波大学 教授	博士（社会工学）	川島 宏一	
副 査	中央大学 助教	博士（工学）	須永 大介	

論 文 の 要 旨

審査対象論文は都市計画の中で「健康」が強く意識されるようになった現在において、健康な生活習慣をいかにして促進できるか、その都市・社会環境のあり方に対して客観的な検討を行った研究である。まず第1章では、歴史的な観点から本テーマに深く関係する都市計画分野と公衆衛生分野の成り立ちと重なりについて整理し、研究の背景を明確にしている。第2章では国内外における健康都市の試みを整理するとともに、既存研究を俯瞰し、あわせて本論文の位置づけと目的を提示している。次に第3章では、論文中に用いられている様々な概念と用語を定義し、健康都市に関する分析を進めるうえでのフレームワークを解説している。さらに第4章では、健康都市に関する都市計画分野と公衆衛生分野の接点に言及し、それぞれに関連する評価指標群を体系化するとともに、各用語の共起関係について解析を行うことで「主観」と「客観」の両面に基づいた検討の重要性を指摘している。これを踏まえ、第5章からは個人の生活習慣に着目し、その促進のための行動変容ステージと個人の健康状態・属性および促進・阻害要因との関係をモデル化している。徒歩習慣や栄養バランス習慣など、対象とする健康習慣によってその構造が異なることを明らかにするとともに、疎外感が阻害要因として大きな比重を占めていることが抽出された。さらに第6章では、個人の性格因子と阻害リスクとの関係性についても検討を進め、チャレンジ性向が高かったり、時間制約が厳しいと中断ステージに留まるケースが多いことを示唆している。最後に第7章において、本論文で得られた成果を整理するとともに、都市計画分野と公衆衛生分野が連携し、相互補完することにより、健康都市の構築がスムーズに進められることの期待が示されている。

審 査 の 要 旨

【批評】

本審査対象論文は社会の成熟化と共に健康意識の高まっていることに着目し、健康都市づくりの一環として個人の健康な生活習慣を促進する都市・社会環境の構築に定量的な観点から言及したものである。分析に先立ち、まず近代都市計画が産業革命時代の劣悪な都市環境がもたらす衛生環境を改善するための公衆衛生学と不可分な関係であったことに言及している。その後、衛生環境の改善などによる疾病構造の変化に伴い、都市計画分野と公衆衛生分野はその袂を分かťことになった。しかし、近年着目されるようになった健康都市づくりという観点において両者が再び相見えることになり、その距離を縮めることの重要性を示唆しているところが本論文の有する重要な新規性といえる。あわせてこの両分野の特性をそれぞれで用いられている評価指標を突き合わせることによって検討し、「主観的評価」と「客観的評価」の両方を含めた統合的モデルを構築することの必要性を説いている。分析に際しては「朝食」「栄養バランス」「飲酒」「睡眠」「運動」「徒歩」の6種類の生活習慣を取り上げるとともに、それぞれの行動変容ステージを「維持」「行動」「逆戻り」「準備」「無関心」の5段階に設定し、各組合せごとの構成者の主観的健康意識を独自の調査を通じて明らかにしている。あわせてそれぞれの良好な生活習慣の継続への阻害要因について、多数の共分散構造モデルを用いることにより解明を進めている。分析結果として特に共同体からの疎外感が各習慣の促進を阻害する効果が大いことが示された点は社会政策上有用性が高い。さらに、個人の性格をも考慮した複合的属性を取り入れ、「中断」ステージを軸として各生活習慣の行動変容ステージに影響を及ぼす要因を定量的に検討している。分析の結果、チャレンジ特性やコミットメント特性が強い者ほど、阻害リスクを感じやすいという興味深い結果が得られており、行動変容促進の際に有用となる参考情報が提供されている。これら種々の分析結果は基本的なデータを丹念に分析した結果得られたオリジナルな内容で、分析においてはまだ粗削りな部分もあるが、結果的に新たなテーマを発掘した点についても評価でき、今後の更なる研究の発展に期待したい。

【最終試験の結果】

令和2年7月20日、システム情報工学研究科において、学位論文審査委員の全員出席のもと、著者に論文について説明を求め、関連事項につき質疑応答を行った。その結果、学位論文審査委員全員によって、合格と判定された。

【結論】

上記の学位論文審査ならびに最終試験の結果に基づき、著者は博士（社会工学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。